信楽の一念について

稲葉秀賢

一

パスカルが信仰は賭であるといったことから、真宗の他力信心を賭であると解する人がある。果して真宗の他力回向の信心が賭と云いうるのであろうか。それを宗祖の聖教の上にたしかめてみたいと思う。

宗祖は『教行信証』「信巻」の別序に、

「夫れ以れば、信楽を獲得することは、如来選択の願心自り発起す」

といって、信楽の一念が如来選択の願心より発起するものであることを明らかにしていられる。ここでは、「夫れ以れば」といって、信楽の発起が遠く如来の願心に基づくことをあらわし、それは「行巻」の「正信念仏偈」に、

「速かに寂静無為の楽に入ることは、必ず信心を以て能入と為すといへり」

とある信心を承けて、その信心が願心の発起であることを明かされたのである。

蓋し「正信偈」の「必以信心為能入」の文は、元祖が『選択集』に、

「生死之家には疑を以て所止と為し、涅槃之城には信を以て能入と為す」

とある文に基づくことは明らかである。即ち元祖に依れば念仏の行者は必ず三心を具すべきであり、その三心こそ行者の至要であるとして、信心が涅槃を得る正因であることを明らかにせられたものである。然るにかくの如き信心は念仏行者の具すべき至要であることにおいて、常に行者の発起すべきものであるが如くに受けとられ易い。即ち念仏は他力本願の行であっても、それを受持す

るものは行者の信心であると捉われるのである。そこに定散の自心に迷う深い躓きが産れるのである。之に対して宗祖は、念仏が本願他力の行である限り、その行に具する信心も他力であって、信心は私のものでありながら、それは如来選択の願心より発起する所であり、そこに毫末の計慮があってはならぬことを明らかにせられた。このことは、信心が私のものであり、最も具体的な宗教的自覚であることにおいて、容易に脱しきることができぬ深い迷妄に繋がるものである。『歎異鈔』の後序に、「故聖人の御ものがたり」として記されている信心の諍論は、この間の消息を最もよく物語るものである。即ち、

「法然聖人の御とき、御弟子そのかずおはしけるなかに、御信心のひともすくなくおはしけるに」

「聖人の御信心に善信房の信心ひとつにはあるべきぞ」

と争う人があったのは、それぞれの智慧才覚によって信心が異なると領解していたからである。智慧才覚の深い人は信心も深く、智慧才覚の浅いものは、その信心も浅いということは、信心がそれぞれの智慧才覚に基づくと受けとられていたからである。それが自力の迷心であり、信心を飽くまで自らの智慧才覚によって獲得すべきものとしたからである。然るに、

「法然聖人のおほせには、源空が信心も如来よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も如来よりたまはらせたまひたる信心なり、さればただひとつなり、別の信心にておはしまさんひとは、源空がまひらんずる浄土へは、よもまひらせたまひさふらはじ」

と仰せられることになったのであって、信心は如来よりたまはるものであって、自らの智慧才覚によって発起するものではないのである。然らば「如来よりたまはりたる信心」とは如何なる意味を持つのであろうか。

二

思うに信心は一応は我々の発起するものであることは否むことができない。それ故に、「正信偈」には、

「能く一念喜愛の心を発すれば」

と云い、又『文類』「正信偈」には、

「信心開発すれば即ち忍を獲」

といっているし、「信巻」には、

「夫真実の信楽を按ずるに、信楽に一念有り、一念とは斯れ信楽開発の時剋の極促を顕わし、広大難思の慶心を彰わす也」

といっている。ここに能発とか開発とか云われるのは如何なる意味であろうか。

凡そ開発とは、「聞き開く」という意味であって、大悲願心を聞き開くことであり、従って大悲願心を聞き開くということは、それによって広大の仏智を獲得することである。

「智慧の念仏うることは、法蔵願力のなせるなり、信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし」

であって、法蔵願力の徹底が信心の智慧である。従って信心の智慧はわれわれの智慧才覚に基づくのではなく、大悲願心を聞き開く願心の徹底において成就するのでなければならない。一念の信心の内容が常に喜愛心とあらわされ、広大難思の慶心と示されるのは、かくの如き信喜の相を通して、それが広大の仏智の獲得であることを示されたものである。広大無碍の仏智、それは一切衆生を摂取するものであるが、その仏智を衆生の心中に領得し、そこに大慶喜心を生ずるのであって、そこには些かも自らの力を恃み、己が智慧才覚を誇るものが存しない。ただ慶喜の心があるのみである。このことを明らかに証明するものは本願成就の文である。

「諸有る衆生、其の名号を聞きて信心歓喜せむこと乃至一念せむ、至心に廻向したまへり、彼の国に生れんと願ずれば、即ち往生を得て不退転に住せむ」

この文は、宗祖の宗教体験に基づく独自な読み方であるが、ここで注意すべきは、「信心歓喜せむこと乃至一念せむ」、「至心に廻向したまへり」といって、乃至一念の一念が信の一念であり、然もその信の一念が至心に廻向せられた他力の信心として読みとられていることである。他力廻向であるから、聞信の内容はただ歓喜であって、自らの計慮でもなければ、自らの誇示でもない。ただ其の名号に示された大悲願心の徹底として、広大無碍の仏智が喜ばれるのである。それ故に溯って云えば其の名号とは、十方恒沙の諸仏によって讃嘆された無量寿仏の威神功徳の不可思議であって、そこに無碍の仏智の獲得がある。

思うに無量寿仏の威神功徳とは、寿命無量と光明無量とに帰せられるであろう。寿命無量は大慈悲であり、光明無量は智慧であるが、慈悲は体であり、智慧は用であるといはれる。然も体は常に用を通してあらわされるのであるから、光明の智慧こそ、無量寿仏の威神功徳をよく示すものと云わねばならない。然るに智慧のかたちとしての光明無量とは如何なる意味を持つのであろうか。

智慧の用きは知るということである。然るに知るということは、我々の常識において考えられているように必ずしも容易なことではない。何故なら、知るということは、相手と一体となることだからである。例えば科学的知識は純粋な智慧であるが、科学的知識にあっては人間の私意は如何なる意味においても許されない。そこに若し私意が交ることがあるならば、もはやそれは科学的真理ではあり得ないであろう。却て科学的知識にあっては、物そのものになって、人間的私意を加へることなく、その因果関係を明らかにしてゆくものでなければならない。従て科学的実験は最も客観的態において行われねばならぬのであって、かりにも人間によって考えられた私意の設定があってはならないのである。

然るに我々は人間の業縁関係を、科学的知識の如く客観的にきわめることができない。それ故に人間関係にあって、相手を知るということは容易ではないのであって、最も親しい親子夫婦という如き間柄にあっても、相手と一体になるということは至難なことである。そこに人間の智慧が有限であるという限界がある。之に対し如来が光明無量として、その智慧に限界がないということは、人間の業縁を知りとほしていられるということである。凡ゆる衆生の業縁関係を知り尽すが故に、如何なる罪も悪も許し得るのである。凡てを知り尽す如来の前に立って、赦されぬ罪はあり得ない。そこに十方衆生若し生れずば正覚を取らじという大悲の確信がある。まことに救済の確実性はわれわれの側にあるのではなくて、常に如来願心の側にある。従ってその願心が聞信される時、そこには一点の不安もなくて、ただ如来願心の深さと、広大の智慧が仰がれて、歓喜に満されるのである。従って聞く所に願心の徹底があるのであって、聞くということは衆生の智慧ではない。そこに信心が他力廻向であるといわれる所以がある。まことに聞とは如来の側からは廻向であり、聞くということは如来の廻向にあずかるということでなければならない。然らば、かくの如き聞信の一念は如何にあらわされているのであろうか。

三

信楽の一念を釈するについて、宗祖の上に二つの解釈が示されている。

一は時尅に就いてであって「信巻」に、

「夫真実の信楽を按ずるに、信楽に一念有り、一念とは斯れ信楽開発の時尅の極促を顕わし、広大難思の慶心

を彰わす也」

と説かれるものである。ここに時尅といわれるのは勿論時間であるが、その時間は所謂物理的時間ではないであろう。曇鸞は『論註』上巻の終に、

「百一の生滅を一刹那と名づく、六十刹那を名づけて一念と爲す、此の中に念と云うは、此の時節を取らざる也、乃至、経に十念と言うは業事成弁を明かすならく耳」

といっている。古来これを実時に対し、仮時という言葉であらわしているが、仮時とは自覚的時間を云うのである。それ故に曇鸞は業事成弁という言葉でそれをあらわしたのであって、それは業事成弁といわれる回心の事実を念として時間的に表現したのに過ぎない。それ故に時尅の極促といわれるのであって、極促とは極限であり、自覚の一念を示したものである。『一念多念文意』には、

「一念といふは信心をうるときのきはまりをあらはすことばなり」

といっているし、『末灯鈔』には、

「本願の名号を一声となへて往生すと申ことをききて、ひとこえをもとなへ、もしは十念をもせんは行なり、この御ちかひをききてうたがふこころのすこしもなきを信の一念とまふすなり」

といって、本願の誓いを聞いて疑う心のないのを信の一念といっている。従ってそこには賭に見るような不安はなく、如来の確信が衆生の確信として受けとられている。そうした如来願心の自覚を「信心をうるときのきはまり」といったのである。

若しこの一念を物理的時間とするならば、信の一念は忽ち過ぎ去って再び復らざる時間的一点として、それは単なる記憶になり終るであろう。かの異解者が往生ほどの大事に自覚――ここでは記憶に過ぎぬ――がないはずはないとして、一念に年時的な覚を云うのは、全く信の一念を物理的時間と領解しているからである。まことに一念は不覚の覚として、往生一定の自覚に外ならぬのである。

二には信相に約して「信巻」に、

「一念と言うは、信心二心無きが故に一念と曰う、是を一心と名く」

と云えるもので、それは二心なき信相から一念を釈したものである。即ち一念とは、二心なき相であって、そこには一点の疑慮もないのである。二心なしというところに賭の意識はない。賭は疑慮がないのではなくて、寧

ろ疑慮の中に自己を投げだした姿に外ならない。賭には決定心がない。ただ遮二無二な決断があるのみである。如来の願心に感応する歓喜の信心には、決定心があり、それは自己の決断ではなくて、如来の決断とも云うべき面があるのであって、賭とは全くその性格を異にするものである。『浄土真要鈔』本に、

「ただ如来の名号を聞きて機教の分限をおもいさだむるくらゐなり」

とあって、ここには機教の分限という言葉が用いられている。分限ということはその限界を知るということであって、無有出離之縁という機の限界において、阿弥陀仏の四十八願衆生を摂受し給う、疑なく慮なく、彼の願力に乗じて定んで往生を得という教が感応するのである。そこでは彼の願力に乗じて定んで往生を得るのであって、往生を得るか得ないか不定なのではない。そこに決定往生と何らの疑慮を持たぬところに他力の一心の重要な意味がある。賭の場合には、かくの如き決定心はないのであって、救われるか救われないかが神に委ねられることにおいて決断があるけれども、そこに必ず不定の思いがある。宛も第二十願の機が、念仏しながら、能修の心に拘わって、常に不安を感じ、遂に来迎を期するがくである。そこには自力の行を捨て、他力の念仏に帰する決断はあるけれども、しかも決断する自力の心をたのむから、そこに自ら能称の功を募ることとなり、決定の心を欠くのである。不定聚の機と云われる所以である。

然るに他力の信心にあっては、『一念多念文意』に、

「信心は如来の御誓をききて疑ふ心なきなり」

といい『唯信鈔文意』に、

「この信心を得るを慶喜といふ」

とあるが如く、それは無有疑心であり、慶喜であって、毫末の不安をも伴わないはずである。何故なら、それは如来願心の徹底として他力廻向の信心だからである。よし衆生は疑っても、如来は衆生を救うことに些かの疑念も持たない。その如来の広大の智慧が徹底するところに信心が成就するのである。『最要鈔』に、

「信心をばまことのこころとよむうえは、凡夫の迷心にあらず、またく仏心なり、この仏心を凡夫にさづけたまふとき、信心とはいはるるなり」

とあるのは、よく他力廻向の信心の性格を顕彰した言葉である。従て賭には必ずそれが不定であることにおいて、不安と疑慮を伴うけれども、他力の信心にあっては、かくの如き不安も疑慮もない決定往生の慶喜心に外なら

ぬのである。ここに信心が常に慶喜であらわされると共に、それが二心なき決定の自覚であることが示されたのである。

かくて他力の信心は物理的時間の線上にある一点として、過ぎ去りゆく記憶ではなくて、常に二心なく願力に乗じて、慶喜する具体的自覚であり、そこに「憶念の心つね」と云わるる如き不断の連続がある。それ故にこそ古来信体続信相不続と云われて来た如く、憶念の心として、二心なき決断が連続するからこそ、仏恩報ずる思いとして、非連続の信相があらわれるのである。まことに他力廻向の信心は賭の如き単なる決断ではなくて、決定往生の歓喜慶喜を内容とする具体的自覚であることを忘れてはならない。然らば信心が自覚的といわれる具体的内容は如何なるものであろうか。

四

信心の利益として宗祖が常に云われたことは摂取不捨の利益ということである。『末灯鈔』に、

「如来の誓願を信ずる心のさだまるとまふすは摂取不捨の利益にあづかるゆへに、不退の位にさだまると御こころえさふらふべし、真実信心のさだまると申も、金剛の信心のさだまるとまふすも摂取不捨のゆへにまふすなり」

とあり『唯信鈔文意』にも、

「誓願真実の信心をえたるひとは、摂取不捨の御ちかひにおさめとりてまほらせたまふによりて、行人のはからひにあらず、金剛の信心となるゆへに正定聚のくらゐに住すといふ、このこころなれば憶念の心自然におこるなり」

と示されているが如くである。それ故に信心の利益は摂取不捨であり、摂取不捨とは正定聚に住するということであるが、そこに我々は決定往生の慶喜と共に、かくの如き摂取の心光に護られている生活の喜びを感ずるのであって、それは賭の心理とは全く異なるものと云わねばならない。宗祖は『往生要集』の「我亦在彼摂取中、煩悩障眼雖不見、大悲無倦常照我身」と云う文を解釈して、

「我亦在彼摂取中といふは、われまたかの摂取のなかにありとのたまへるなり、乃至、常照我身といふは常はつねにといふ、照は無碍の光明信心の人をつねにてらしたまふとなり、つねにてらすといふはつねにまもりたまふとなり、我身はわがみを大慈大悲心ものうきことなく、つねにまもりたまふとおもへとなり、摂取不捨のこ

ころをあらはしたまふ、念仏衆生摂取不捨の文を釈したまへるなり」

とあって、つねにてらすというはつねにまもることであると云っていられる。従って摂取の心光に照らされるということは、摂取の心光にまもられるということであり、こうした信仰生活の具体的相状をあらわしたのが、現生十益であることを思わしめられる。

かくの如く信の一念に摂取の光益にあずかり、正定聚に住するということ、その源は願成就の文に基づくのであって、その文に、

「諸有る衆生、其の名号を聞きて信心歓喜せむこと乃至一念せむ、至心に廻向したまえり、彼の国に生れんと願ずれば、即ち往生を得て不退転に住せむ」

とあり、信心の一念に即得往生の大益を得るのである。ここに即得往生とは摂取不捨の利益に遇うことであり、正定聚に住することである。それ故に『唯信鈔文意』には、

「即得往生は信心をうればすなわち往生すといふ。すなわち往生すといふは不退転に住するをいふ、不退転に住すといふは、すなわち正定聚のくらゐにさだまるなり」

と云い、『一多文意』にも、

「即得往生といふは、即はすなわちといふ、ときをへず日おもへだてぬなり、また即はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり、得はうべきことをえたりといふ、真実信心をうれば、すなわち無碍光仏の御こころのうちに摂取してすてたまはざるなり、摂はおさめたまふ、取はむかへとるとまふすなり、おさめとりたまふとき、すなわち、とき日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを往生をうとはのたまへるなり」

とあるが如く、即得往生は信の一念に正定聚に住することであり、その一念は常に今として慶喜を内容とするものである。そして慶喜とは、『唯信鈔文意』に、

「慶はうべきことをえてのちによろこぶこころなり、信心をえてのちによろこぶこころなり、喜はこころのうちにつねによろこぶこころたえずして、憶念つねなるなり」

と云って、憶念の心常にして仏恩報ずる思いの満ち満ちていることである。それ故に慶喜の具体的内容が現生十種の益として示されている。かくて「信巻」にあっては、信の一念を明かし終って、

「金剛の真心を獲得する者は横に五趣八難の道を超え、

必ず現生に十種の益を獲るなり」

と云っている。ここに現生十種の益はそれに依って無量の徳を示しつつ、それを最後の入正定聚の益に帰せしめている。正定聚は先に挙げた即得往生の解釈に明かであるように、「おさめとりたまふとき、すなわちとき日をもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを往生をうとはのたまへる」のであり「不退転に住すといふは、すなわち正定聚のくらゐにさだまる」のであって、それは不退転に住するのであり、補処の弥勒に同じく、如来と等しいのである。かくの如き慶喜を内容とする正定聚の自覚が如何にして賭から生ずるであろうか。まことにそれは如来選択の願心より発起するところでなければならない。ここに「この信心仏性なり、すなわち如来なり、この信心をうるを慶喜といふ」という宗祖の解釈も、「涅槃の真因は唯信心を以てす」という已証も如何にもと頷かるるのである。

かくて「信巻」では、現生十益に照応せしめて、「真仏弟子と言うは、真の言は偽に対し、仮に対するなり、弟子とは釈迦諸仏之弟子、金剛心の行人なり、斯の信行に由て必ず大涅槃を超証すべきが故に真の仏弟子と曰う」

と明し、必至滅度の確信が正定聚であることを宣明せられた。まことに住正定聚は必至滅度であり、それは異った二つの利益ではないであろう。蓋しそれが二益であるとあらわされたのは、正定と滅度が異質的な利益であることを云ったのではない。特に正定聚を必至滅度と示されたところに重要な意味があるのであって、必至ということは、正定聚の中に滅度を内徳として具するということである。それ故に、大涅槃は臨終の一念に超証すべきであり、そこに往生即成仏ということがいわれるのであるけれども、然も「往生すといふは不退転に住するをいふ、不退転に住すといふは、すなわち正定聚のくらゐにつきさだまるなり」といわれるのであって、不退転に住するということ、即ち正定聚に住することが往生であるといわれるのも、正定聚不退転に涅槃の徳を内具するからである。然し正定聚は必至滅度ではあっても、直ちに滅度ではないであろう。即得往生の「得はうべきことをえたり」ということであり、慶喜の「慶はうべきことをえてのちよろこぶこころ」であって、ここに「うべきこと」とは滅度であって、その「うべきことをえた」のが即得往生である。従て正定聚はそのまま涅槃ではないけれども、「うべきことをえた」のであるから、正定聚に

は自ら涅槃の徳を具するということが自然であるといわねばならない。ここに宗祖が信心の人を如来と等しといって、同じとは決して云われなかった深い意味も領解せられる。蓋し等しということは「AはBに等し」という形であらわされるもので、AとBは明かに異れるものでありつつそれが等しいと云われるのは、仏性としての信心が廻向せられているからである。そうでなければ、無善造悪罪悪生死の凡夫が如来と等しいと云われる筈がない。如来の大悲願心の徹底において、広大無碍の智慧がわれらの信心となるところにのみ、如来と等しということが云われるのである。

かくて他力廻向の信心は、賭の心理と全く異ることが明らかにせられるのであって、「信心をばまことのこころとよむうへは凡夫の迷心にあらず、またく仏心」であって、その仏心のはたらきにおいて信心が成就するのである。それ故にこそ、信心は金剛堅固の信心であって、凡夫の思慮において賭けられたものであるならば、如何にしても金剛堅固ではあり得ず、そこに限りない不安と動揺を免れることはできぬのである。まことに如来願心の徹底において成就せられた信心なればこそ、慶喜を内容として、我々の具体的生活を動かす力となり得るのである。『浄土真要鈔』に、

「往生のさだまるしるしには、慶喜のこころおこるなり、慶喜のこころおこるしるしには報恩謝徳のおもひあり」

とあるのは、信心の生活を最もよく表現した言葉であり、ここに信楽の一念の具体相があることを知らねばならない。

大谷大学図書館

第三和漢書分類目録

第一分冊　B5判　横2段組　728頁
定価　7,000円

第一門・仏教通記
第二門・各宗別記
第三門・真宗

昭和7年8月～昭和40年3月 増加
昭和42年6月発行

申込所　大谷大学図書館
京都市北区小山上総町
振替（京都）21783番